サッチャリズムに関する一考察（2）

田　中　文　憲*

A study on Thatcherism（2）

Fuminori TANAKA

要　旨

本稿は、論文：サッチャリズムに関する一考察の後半部分（ⅡおよびⅢ）である。

サッチャリズムの分析を通して以下のことが明らかになった。

サッチャーは幼少期に父親から勤勉、倹約、自助の精神をたたき込まれ、また下層中流階級に生まれたことが、彼女の強い上昇指向を生んだ。また、メソディズムの信仰が「信念の政治家」となる素地を作った。さらに、彼女が政治家を目指す切っ掛けも父親のグランサムにおける政治活動と社会活動にある。

サッチャリズムは確かにイギリスを変えたが、一方で負の遺産もある。その最たるものが貧富の差の拡大である。今イギリスに求められるのは、新自由主義の行きすぎを改める新しい、しかもイギリスの伝統にのっとった経済学の構築である。

〔キーワード〕下層中流階級・メソディズム・新自由主義・チャブ

Ⅰ．サッチャリズムの内容

前稿（サッチャリズムに関する一考察（1）奈良大学紀要第 46 号、平成 30 年 3 月）

Ⅱ．サッチャリズムを支えたもの

1．下層中流階級のエートス（Ethos）

マーガレット・サッチャーは、リンカーンシャー（Lincolnshire）のグランサム（Grantham）で雑貨店を営むアルフレッド・ロバーツ（Alfred Roberts）とその妻ベアトリス（Beatrice）の次女として、1925 年 10 月 13 日に生れている。雑貨店の店主は、イギリスにおいては、下層中流階級（lower middle class）に位置づけられる[1)] 階級意識の強いグランサムでは、ロバーツ一家の社会的地位は「商人」（tradesman）として下位に位置づけられていた。したがって、ロバーツ一家

2018 年 9 月 12 日受理　*社会学部総合社会学科教授

の人々は店に来る上流階級の顧客たちからは、決して「自分たちの一員」（one of us）とは見られなかった。たとえば、商店主の娘という階級が災いして、地元の名士であるブラウンロウ卿（Lord Brownlow）から、マーガレット・サッチャーは、彼女が首相になるまで、居宅であるベルトン・ハウス（Belton House）に招かれることはなかった。[2)]

このような環境が、サッチャーの強い上昇指向を形作っていったと考えられる。彼女の強い上昇指向の中心にあるのは、おそらく「スノビズム」（Snobbism）であろう。[3)] 人々には自分より一段上の階層の模倣をしたがる傾向があるが、デヴィッド・キャナダイン（David Cannadine）が指摘するように、とくに中流階級は「下の階級への軽蔑心と上の階級への嫉妬心」が強いとされている。[4)]

マーガレットは進学した Kesteven and Grantham Girl's School では、上の階級の学生たちと付き合っていたといわれている。そのためマーガレットは学校で「スノッブのロバーツ」（Snobby Roberts）と渾名されていたようである。当時のマーガレットの友達は、たとえば、地区で一番の牧師館を持つ牧師の娘であったり、タイヤ製造で成功した人物の娘であったり、Aveling Barford という企業グループの創始者の娘であったりした。[5)]

オックスフォード大学に入学した後も、マーガレットが金持ちの貴族の息子をつかまえようとしていたことが知られている。その一例がクレイグマイル卿（Lord Craigmyle）とのつき合いである。クレイグマイル卿は、当時すでに父親の爵位を受け継ぎ、祖父のインチケープ伯（Earl of Inchcape）から莫大な財産を相続することになっていた。しかし、マーガレットにとって屈辱的なことに、クレイグマイル夫人（Lady Craigmyle）から彼との交際を拒絶された。その時の言い草が「うちには商売（trade）や科学（science）をやっている人間など一人もいない」であった。[6)]

ジョナサン・エイトキン（Jonathan Aitken）は、こうした下層中流階級の出自ゆえの差別を受けたことが、マーガレットの野心に拍車をかけたとみている。[7)]

2. メソディズム

メソディズム（Methodism）とは 1703 年にリンカンシャーのエプワースで生まれたジョン・ウェスリ（John Wesley）によって開始されたイギリスの非国教徒（Nonconformity）の一宗教運動ないし一宗派である。[8)] 18 世紀のメソディズムは 17 世紀のピューリタン主義の影響を強く受けたとされており、ピューリタニズムの徳目とされる勤勉、節約、自制はメソディズムに受け継がれたとされる。[9)] しかし、マックス・ヴェーバーは「メソジスト派の regeneration「新生」が生んだものは、純粋な行為主義の補足であり、予定説が放棄されたのちにおける禁欲生活の宗教的基礎づけにすぎなかった・・・・ともかくメソジスト派は天職観念の発達になんらの新しい貢献もしなかったのだから・・・・1 つの晩生果（Spätling）として基本的には論外においてさしつかえあるまい」[10)] また、「ヨーロッパ大陸の敬虔派とアングロ・サクソン諸国のメソジスト派は、思想内容からみても、またその歴史的発達からみても、二次的な現象だ」[11)] と述べて、あまり重要視していない。また R.H. トーニー（Richard Henry Tawney）も、「清教主義の成長と勝利とその形態の変化とは、17 世紀のもっとも根本的な運動であった・・・・清教主義こそが英国の真の宗教

改革であった。また正真正銘の近代英国が生れてくるのも、まさしく旧秩序に対する清教主義のたたかいからであった」[12] と言い、さらに「清教徒は自分の生活を規律し、合理化し、組織化した。『方法（メソド）』とは、世間のひとびとがメソジスト派の消息をきいた1世紀もまえに、清教徒のあいだではすでに1つの標語となっていた」[13] と述べ、あまり評価しているようには見えない。

浜林正夫によれば、メソディストは国教会内部の革新運動であって、ウェスリは主教制の変革や国教会からの分離を考えていたわけではなかったし、教義的にも国教会を支持しており、そこにかつてのピューリタンとの本質的な違いがあったという。[14]

しかし、メソディスト運動は国教会側から見るとやはり大きな問題があったようである。まず1つは、ウェスリにおける回心体験の重視である。これに対してダラム主教のジョーゼフ・バトラーは、「特別な啓示や聖霊の贈物を主張することは恐ろしいこと」だと警告したという。なぜなら回心とは個人が直接に霊感をうけることであり、それが極端にすすめば神秘主義となって、いっさいの教義を否定することになるからである。もう1つは、巡回説教（itinerant system）である。ウェスリは国教会の認可をうけていない平信徒説教師（lay preacher）を任命し、また独自に資金を集めるために教区教会とは別の組織であるクラスを編成した。これらのクラスはやがてサーキットと呼ばれる連合体をつくるようになり、独自の礼拝堂をもつようになった。やがて、ウェスリの死の4年後の1795年にメソディストは国教会から分離して独立の教会となったのである。[15]

さらに、メソディズムは伝統的な民間信仰を正当なキリスト教に置き換えたのではなく、それらを単純なキリスト教用語へと翻訳することで、民間信仰の中で生きていた人々に強くアピールすることができたのである。またウェスリや説教者による信仰治療も行われたようである。つまり多分に「呪術的な世界」をとり込んでいたとされる。また、メソディズムでは、メンバー相互の霊的平等主義が貫かれており、宗教的営為を任されるリーダーは、専門的に訓練された聖職者ではなく、他のメンバーより勝れた霊的資格、すなわち「カリスマ性」を持った人々だったといわれている。[16]

ロビン・ハリス（Robin Harris）は、やや見下した調子で、マーガレットの両親が正式な系統だった神学上のトレーニングを受けていない証拠として、彼らの「神学」が Bibby's Annual と呼ばれる出版物に基くものだと指摘し、マーガレットもそれを両親から与えられ、彼女のお気に入りであったと述べている。さらに、Bibby's Annual の説く「努力」や「自助」はよいとしても、その「神学」たるやキリスト教と霊魂の生まれかわり（reincarnation）や霊魂創造説（creationism）や迷信（superstition）のごた混ぜであると手厳しい。そして、それは奇妙な神智主義（直観によって神に触れようとする信仰体系）運動（Theosophist movement）から生み出されたもので、ほとんどのキリスト教信者はそれを家に入れさせることはないとまでいっている。[17]

結局、19世紀の前半までにメソディズムを受容した人々は、商業や製造業さらに専門職に携わる裕福な人々の下位、各種の非熟練的職種に就く人々の上位に位置しており、全体として彼らは下層中産階級に属していたと考えられるのである。[18] また、地域的には、北部（とくにヨークシャー）と南西部（とくにコーンウォール）に多く、東南部には少ない。一般的にいってメソディズムは農村部へはあまり浸透せず、工業地帯や、とくに鉱山地帯で大きな影響力を持ったとさ

れ、これはメソディストの説教師たちが国教会の教会制度の未整備な地域に入り込んだからだとされている。[19)]

ロバーツ一家は熱心なメソディストであった。父親のアルフレッド（Alfred）はもちろん彼とメソディスト教会で出会って結婚した母親のベアトリス（Beatrice）それに母方の祖母フォーブ（Phoebe Stephenson）はメソディストというよりピューリタン的な勤勉と倹約の精神を生活の中でも厳格に守り、実践していた。とくに一家の倹約ぶりは少々度がすぎるほどであった。たとえば、アルフレッドはグランサムに2軒の雑貨店を持つようになっても、水道料金を払うのを惜しんで、家に水道を引かなかった。母親のベアトリスも規律（discipline）と厳格さ（strictness）を祖母フォーブから受け継ぎ、小さい洋服仕立て業（seamstress）を営んでいたこともあり娘たちの洋服から学校の制服まで作ってしまう人であった。母親も倹約家であったが、祖母については、マーガレットがのちに「非常にヴィクトリア朝風で、とても厳格だった」（very, very Victorian and very, very strict）と評していることからもその人となりがうかがえる。またロバーツ家では祖母が1934年に亡くなるまで「主の日」（Lord's Day）には、新聞を読んだり、友達とお茶を飲んだり、裁縫や編み物をすることを禁じられていた。また祖母の生きている間はラジオも置けなかった。マーガレットは後年ロバーツ家では「怠惰は罪だった」（Idleness was a sin）と語っていることからも一家の雰囲気がわかる。[20)]

マーガレットは熱心に教会に通った。彼女は毎週日曜日には、10：30から始まる朝の日曜学校に出席し、その後11：30から朝の礼拝をし、午後3時に午後の日曜学校に出席し、そこではしばしピアノを演奏した。また時々夕方6：30に始まる夕べの礼拝に出席した。マーガレットは讃美歌を歌うのも好きで、とくにジョン・ウェスリの弟チャールズの作った‘Lo, He Comes with Clouds Descending‘や‘And Can It Be That I Should Gain’がお気に入りであった。マーガレットはメソディストの教義問答集（Catechism）を暗記するまでになった。[21)]

しかし、マーガレット・サッチャーの信仰心に疑問をなげかける向きもある。たとえば、ロビン・ハリス（Robin Harris）は、マーガレットに対するメソディズムの強い影響は認めるものの、メソディズムによって彼女が「宗教的」（spiritual）な人間になったとは考えられないという。さらに、彼女はキリスト教の教義そのものにあまり執着心を持っていなかったのではないかとまでいう。その証拠に、彼女は反カトリックではない。たとえば、彼女は教皇ヨハネ・パウロⅡ世やベネディクトXVI世への尊敬の念を明らかにしたし、イギリス国教会とも政治的な不一致はあるものの敬意をもって接した。さらに、彼女はイスラムに対してさえ、一定の尊敬の念を抱いていた。また彼女がユダヤ教に対する偏見を持たなかったこともよく知られている。こうしたことから、ハリスは、マーガレットが、デニス（Denis）との結婚を機に簡単に国教会（Anglicanism）に改宗したのだと結論づける。[22)] この件に関して、マーガレットは自伝の中で、「デニスは英国国教会に属していたが、私たちは、二人が同じ教会に通わないことは、子供たちを混乱させるだろうと考えた。この地元大教会が低教会派〔英国国教内の一派〕[23)] だったことは、メソジストである私が転向するのをそれだけ容易にしてくれた。いずれにせよ、ジョン・ウェスリー〔メソジスト派の創始者〕は、死ぬときまで自分を英国国教会の一員とみなしていたのである。私は、自分が重大な神学的な境界を超えたとは感じなかった。」[24)] と弁解しているが、メソディズムを絶

対視しないマーガレットの宗教観がよく出ていると考えられる。

こうしたことから、ハリスが指摘するように、マーガレット・サッチャーのグランサムにおける宗教体験は、彼女を「宗教心」（spiritual beliefs）ではなく、「政治的信念」（political convictions）へと向かわせたといえる。

3. パーソナリティー

マーガレット・サッチャーは「信念の政治家」と呼ばれ、その個性的な言動が注目されたが、同時に彼女のパーソナリティー自体もわれわれの興味を引く。

マーガレット・サッチャーのパーソナリティー形成に大きな影響を与えたものは、グランサム時代のロバーツ一家の持っていた雰囲気であることは間違いない。メソディストとして勤勉と倹約をやや極端な形で実践する家族から、幼いマーガレットがある種の「すり込み」[25] を受けたことは十分考えられる。その中でも父親の影響はずば抜けて大きかった。

マーガレットが後に首相にまで昇りつめる上昇指向の強さは、父親をロール・モデルにし、さらにその父親をはるかに越えさせた。マーガレットは父親の熱心なメソディストとしての信仰心はもとより、むしろその政治的活動により関心を持ったと考えられる。

父親のアルフレッドは、家庭が貧しく十分な教育を受けられなかったが、図書館から借りた本で独学し、多くの知識を身につけた苦労人であった。彼はメソディストの平信徒説教師（lay preacher）として教会で説教を頻繁に行うなどその名説教で名前が知られていた。やがて彼は地区の上級説教師（senior lay preacher）になり、また「巡回幹事」（Circuit Steward）となって、グランサム地区の 32 のメソディスト教会の説教師をたばねる責任者になった。彼は「巡回タクシー」（circuit taxi）と呼ばれる専用車でリンカンシャーの町や村を回って説教をし、マーガレットも時々父親に同行している。[26] その後アルフレッドは、市議会議員（councillor）、市財政委員会委員長（Chairman of the Borough Finance Committee）、上級市議会議員（alderman）そして 1945 年から 46 年に市長（mayor）になった。しかし、1952 年、労働党が市議会選挙で勝ち、アルフレッドは上級市議会議員の座から追放された。マーガレットは、「この日のことを思い出すといまでも悲しくなる」と 1995 年に書かれた自伝で述べている。[27] アルフレッドは、その他にもロータリーの会長（President of Rotary）、商工会議所の会長（President of the Chamber of Trade）、労働者教育連盟の会長（Chairman of the Worker's Educational Association）や国民貯蓄運動の会長（Chairman of the National Savings Movement）を歴任している。[28]

マーガレットは、「父の政治は〝古いタイプのリベラル（old- fashioned liberal）〟というのがおそらくいちばん適切だっただろう。彼の合言葉は〝個人の責任〟であり・・・・彼は自由党が集産主義をを容認したことにいわば幻滅していた。・・・・しかし、私が記憶している限り、父はゆるぎない保守党支持者以外の何ものでもなかった」と述べている。[29]

マーガレットは、自伝に「私はいつも妥協のない根っからの（true blue）保守党支持者だった。それは、本能的なものでもあり、育てられ方によるものでもあった」[30] と述べている。アルフレッドはマーガレットが 10 才の時、すなわち 1935 年の総選挙の時に、すでに彼女を政治と関わらせている。たとえば、使い走りとして投票所の外に設けられた保守党の投票集計係のところから

投票用紙を最寄りの委員会室に運ばせたり、保守党候補者のヴィクター・ウォレンダー（Sir Victor Warrender）のために、ちらしを折ったりさせている。[31] マーガレットが、自分の保守党支持は「本能的なもの」（by instinct）と言っているのは、父親からの「すり込み」があったせいではないかと推測される。

マーガレット・サッチャーは、非常に「道徳的」（moral）な人物としても知られている。ジョン・キャンベル（John Campbell）は、彼女がそうなった原因として、まず、父親の影響を上げる。彼女は善と悪をはっきり分けることに強い自信を持っていたが、その強さは父親をはるかに越えていたという。後年マーガレットのこの性分はますます強くなり、政治的にも社会的にもこの世界を「黒と白」、「羊と山羊」（＝善人と悪人）、「われわれ（us）とやつら（them）」に分けるようになったが、キャンベルは彼女のこの戦闘的な、また決めつける性格は、父親譲りではなく、彼女の個性だと結論づけている。[32] キャンベルは、もう1つの原因として、マーガレットが理系人間であったことを指摘する。たとえば、学校時代には化学、生物学、動物学、地理学で最優秀の成績をとったが、フランス語と英語（国語）は苦手（F grades〔fair to weak〕）であった。[33] 彼女自身も「私は専門的な細かい事柄についてかなり複雑な数字を比較的簡単に理解する能力に恵まれていた」と自伝の中で述懐している。[34] キャンベルは、マーガレットがオックスフォード大学に入学後も歴史や文学をほとんど読んでいない、つまり一般教養に欠けるという。こうしたことから、キャンベルは、彼女の受けた科学的トレーニングは彼女に明晰性と実践性を与えたが、一方で、多様なものの見方や懐疑的にものごとを考える能力を奪ったのではないかという。こうしたことから、彼女は皮肉やユーモアの感覚を欠き、曖昧さや曖昧な言葉遣い（equivocation）に不寛容な人間になっていったという。キャンベルはこうしたことが後年マーガレットの尋常ならざる性格の強さを生み出す一方、他の人々の意見や人生経験に対する想像力や同情心を欠く態度をとらせることになったと結論付ける。[35]

クレア・バーリンスキー（Claire Berlinski）は、マーガレット・サッチャーのカリスマ性（それも女性としてのカリスマ性（feminine charisma））に注目する。バーリンスキーはサッチャーほど女性であること（feminity）をうまく利用した人物はいないという。たとえば、サッチャーは、①偉大なプリマドンナ（The Great Diva）②国民の母（The Mother of the Nation）③内気な浮気女（The Coy Flirt）④金切り声で叫ぶ意地悪ばばあ（The Screeching Harridan）⑤女王戦士ブーディカ（Boudicea, the Warrior Queen）⑥女監督（The Matron）⑦主婦（The Housewife）をかわるがわる、意図的に演じたという。[36] とくに大衆の前では、倹約家の主婦であることを彼らの潜在意識下に植えつけることができる天性の才能があった。[37] サッチャーは、「マーガレット・サッチャー」役を演じ切るたぐいまれな才能があったといわれており、ハリウッドの幹部たちは、サッチャーがマーロン・ブランドやマリリン・モンローと同じ「それ」（It）を持っていたという。[38]

また、オックスフォード大学のベリオール・コレッジの学長（＝学寮長）〔Master〕を勤めたアンドリュー・グラハム（Andrew Graham）は、バーリンスキーのインタヴューに応じて、「サッチャーはとにかくユニークな人物であり、彼女のカリスマ性の源はセゴレーヌ・ロワイヤル（Ségolène Royal）や、ヒラリー・クリントン（Hillary Clinton）にはない圧倒的なそして岩のよ

うに固い「権威」（authority）であるとし、同時に、ほれぼれするような美人ではないが、魅力的な女性である。さらに、彼女は母性の典型であり、多くの人が彼女を見て自分の母親か学校時代の先生を思い出すような存在である」[39] と述べている。バーリンスキーは、そのようなサッチャーに一番困惑させられた政治家として、当時の労働党の党首ニール・キノック（Neil Kinnock）を上げている。キノックは「彼の敵対者が女性だという単純な事実に錯乱し、狼狽して、どうしていいのかわからなくなってしまった」[40] と述べている。

4. 保守主義と新自由主義

マーガレット･サッチャーは、自伝の中のさまざまな箇所で、「当時の私の共産主義への敵対は、理性的というより本能的なものだった」[41]、「私個人としては、自分がある不思議な方法で本能的に大多数の国民と心を一つにしてしゃべり、感じているのだということを意識している」[42]、「私は確信の政治家です。旧約聖書の預言者たちは・・・・こう言ったのです。〝これが私の信仰であり、ビジョンである。もし、あなた方もそれを信じるのであれば、私についてきなさい〟今晩、私は皆さんに同じことをを申し上げます」[43]、「後年になって「資本主義」とか「自由な企業システム」と考えるようになったことについても、私は共感的な直観を身につけていた」[44] と述べている。これではまるで「シャーマン」か預言者が神の声を直接聞いて、ご託宣をしているかのようである。これと同じような見解をバーリンスキーも述べている。バーリンスキーいわく、後年サッチャーが「マネタリズム」を取り入れていたのは、「ただそれが正しく思えたから」（it just sounded just）であって、それは「ほとんど宗教的確信（almost religious faith）であった」からである。[45] また、アンドリュー・グラハムが「サッチャーは顕著に本能で動く政治家（remarkable instinctive politician）だと思う」と述べたことを紹介している。[46]

サッチャーは、自分の思想形成に大きな影響を与えた人物として、まずF･A･ハイエク（Friedrich A・Hayek）を上げる。サッチャーは、ハイエクの『隷従への道』[47] を「社会主義的計画や社会主義国家に対する、もっとも説得力にあふれる批判の書として、私がこのころ（オックスフォード大学時代：筆者注）読み、その後もたびたび読み返している」と述べている。しかし、同時に、「私はこの当時、ハイエクのこの小さな傑作の意味するところを完全に理解したとはいえない、ハイエクの提唱する考え方を本当に理解するようになったのは、1970年代半ばになってキース・ジョゼフがくれた必読書リストのいちばん上にハイエクの著書が何冊か挙げられていたときだ」と正直に告白している。[48]

この点に関して、J. キャンベルは、「オックスフォード大学で化学の学位をとるために必死だったサッチャーに、歴史やPPE（politics, philosophy, economics）を読む余裕があったとは思えない。ましてや1944年にハイエクの「隷従への道」を注意深く読んだというのは極めて疑わしい」といい、後にキース・ジョセフやサッチャーのアドバイザーになるアルフレッド・シャーマン（Alfred Sherman）が、1975年にサッチャーに会った時、「彼女はハイエクの著作をまったく読んだことがないのではないかとの印象をもった」ことを紹介している。[49] J. キャンベルは、「サッチャーがその後30年以上にわたってハイエクの影響についてほとんど言及しなかったことにとくに驚かない。なぜなら、彼女はつねに感情と本能の政治家（gut politician）で知的な議論を必

要としなかったからだ」と述べ、ハイエクの影響云々などというのは、自分を知的にみせるための「後付け」にすぎないと手厳しい。[50)]

次に自伝に言及があるのが、カール・ポパー（Karl Popper）である。サッチャーは「私が科学者だったことが、マルクス主義の主張のいくつかについて、一般の人とは違った洞察力を与えてくれた」といい、大学を卒業した後で読んだという『開かれた社会とその敵』を上げる。そして「ポパーの分析は多くの点でハイエクの分析を補うものだが、彼はマルクス主義に自然科学の視点から接近した。このことは、歴史、社会の発展あるいは〝進歩〟の不変の法則・・・・を発見したというマルクス主義者の虚偽の主張を暴くのに、ポパーには理想的な準備ができていた」と続ける。[51)] さらにマルクス主義のこうした基本的誤謬の政治的帰結は、『歴史主義の貧困』への献題にある「歴史的運命の不変というファシズム的、共産主義的信念の犠牲となったあらゆる信条の、あらゆる国の、あらゆる民族の無数の男たち、女たち、子どもたちを偲んで」[52)] に要約されているという。[53)] サッチャーは、「このようなものを読んでいた私が、1946 年 3 月 5 日、ミズーリ州フルトンにおけるチャーチルの演説に・・・・」[54)] と述べているが、このような早い時期に、サッチャーがこれらの著作を読んでいたか相当疑わしい。なぜなら『歴史主義の貧困』はポパーが哲学系の学術誌に原稿を送ったが掲載を認められず、1944 年と 1945 年にかけて『エコノミカ』誌においてやっと活字になっているからである。[55)]『開かれた社会とその敵』もアメリカでの出版を目論むも、出版社が見つからず、結局 1945 年にルートリッジ社（Routledge & Kegan Paul Ltd）から 2 巻本として出版された。このような経緯と当時の化学の学位論文で忙しいサッチャーの状態を考えると、これらを 1946 年 3 月以前に読んだとは考えにくい。しかも『開かれた社会とその敵』は 2 巻本で、1 巻目の「プラトンの呪文」[56)] だけでも相当なボリュームがある。ちなみに筆者の手元にあるルートリッジ社のペーパーバック版だけでも 400 ページある。

サッチャーが自伝で取り上げるもう 1 人の人物が、A. V. ダイシー（Albert Venn Dicey）である。サッチャーは、「大学やそれ以前の勉強から、私は自由な体制を自由でない体制とへだてるものは、まず法の支配の存在・・・・なのだという考えをはっきり身につけていた」といっている。ダイシーはイギリスの憲法学者でオックスフォード大学の教授であったが、1885 年に著した「憲法の法」（The Law of the Constitution）で有名である。ダイシーはこの本の中で、イギリス憲法の 2 大原理として「議会主権」（Parliamentary Sovereignty）と「法の支配」（the rule of law）を上げている。サッチャーはこの原理を「国の法を上回る権威はない」と解釈し、後には「さらに広い範囲に適用されるものだ」と考えるようになったと述べている。ただし、そう考えるようになったのは後にハイエクの『自由の条件』（The Constitution of Liberty）や『法と立法と自由』（Law, Legislation and Liberty）を読んでからのことであると告白している。[57)]

サッチャーは、大学やそれ以前の勉強から「法の支配」の重要さに気づいていたかのような書きぶりであるが、これもすでに述べた理由で、にわかには承服しかねる。これについては、どんなに早くても法律の勉強を本格的に始めた 26 歳以降であろうし、[58)] ダイシーの著作に触れたのは、ずっと後のことであったことは容易に推測される。

では、政治家サッチャーの思想形成にもっとも影響を与えた人物はだれかといえば、それは、キース・ジョゼフ（Sir Keith Joseph）である。キースは 1918 年生まれでサッチャーより 7 歳上

の保守党というより右翼的政治家である。幼少期から秀才でならし、ハロー校からオックスフォード大学のマグダレン・コレッジに進んだ。専門は法学で、優等（first class）で卒業し、名誉あるオール・ソウルズ・コレッジ（All Souls College）の研究員（Fellow）に選ばれている。[59)]

サッチャーは、自伝の中で、キースを評して、「彼は知的で、高潔さと、特に謙遜の徳をわきまえていた」といい、「キースがいなければ、私は野党の党首になることもなく、首相としての職務を全うすることもできなかったであろう」と最大級の賛辞をおくっている。[60)] その証拠の1つは、サッチャーが自伝（The Path To Power）をキース・ジョゼフに献じていることである。[61)]

自伝によれば、サッチャーがキースを知るようになったのは1964年～65年頃、年金問題に共同で対処したことが切っ掛けであった。[62)]

キースがサッチャーに決定的な影響を与えたのは1974年の春、保守党党首ヒースの対抗馬にキースを推す声が高まってからである。キースは、従来の保守党の政策を根本的に見直し、「市場経済」と「マネタリズム」に基づく政策を導入すべく、「政策研究センター」（Centre for Policy Studies）の設立に動き、その会長（Chairman）におさまった。この時、キースが相棒に選んだのが、アルフレッド・シャーマン（Alfred Sherman）である。彼は「研究主幹」（Director of Studies）という肩書きで入ったが、変った経歴の持ち主であった。彼はスペイン内戦を闘った元共産主義者で、すでに過激な右翼に転向していた。キースとシャーマンは奇妙なしかし絶妙なコンビでお互いの足りない部分を補いあっていた。サッチャーは1974年の6月下旬から「政策研究センター」にかかわり、副会長（Deputy Chairman）に就いた。サッチャーが「市場経済」と「マネタリズム」の洗礼を受けたのはキースとシャーマンによってである。とくにサッチャーはシャーマンの才能に魅力され、彼を「天才」（a genius）とまで呼んでいる。[63)]

アンドリュー・グラハムもこの点について、「彼女（サッチャー）はエコノミストとしての訓練をまったく受けていない」したがって「フリードマン（Milton Friedman）に魅入られたキース・ジョゼフがマネタリズムを彼女に吹き込み、彼女はそれに感化されたのだと思う」と述べている。[64)]

キースとシャーマンは、ともにユダヤ人であったが、サッチャーがこの両者に心酔し、尊敬もしたのは、彼女がユダヤ人に対して差別意識をもっていなかったからであり、マクミラン（Harold Macmillan）がキースを「私の知っているたった1人の頭の鈍いユダヤ人」（The only dull Jew I know）と評したこととの違いである。[65)]

シャーマンはサッチャーを「観念ではなく確信の」（of beliefs not of ideas）政治家だと正しくいい当てている。[66)]

サッチャーは自伝で「キースとアルフレッドから私は多くのことを学んだ。自由主義経済と保守主義的な思想のもとになる種々の研究文書をもう一度読み返した」[67)] といっているが、同時に、「経済学に対する私の見解も、自分が生まれ育った世界の中で得た個人的な経験にもとづいている。・・・・街角の店先こそが市場経済学を理解するのに、もっともふさわしい場所である。後年、資本主義に対して私は多くの抽象的な批判を耳にしたが、それらは私自身がグランサムで学んだ経験とは相反するものばかりだった。このようにして私は、戦後のイギリスの経済的通念には染まらずに済んだのである」[68)] といっている。まさに、自分の見たもの、聞いたもの、経験したこ

としか信用しない、信じたいものしか信じない、直観と本能の政治家サッチャーの面目躍如といったところである。

その後、キース・ジョゼフの政治生命を脅かす事件が起きる。1974年10月19日キースがバーミンガムのエジバストンで行った講演で、キースは、「われわれの人口、つまりわれわれの人的資源がいま、脅威にさらされている」「子供を育てることについてまったく適性を欠いている若い母親たち、つまり社会階級でいえば4級、5級の若くして妊娠した女性から生まれた子供の人口比率が急激に高まっており、それが社会に損害を与えている」と述べたが、これに対してあらゆる方面からキースを「常軌を逸した人種改良論者（eugenicist）だ」と非難する声が上った。これに対して、保守党主流派は喜びを抑えることができなかった。彼らはキースを「判断力の欠如」を理由に葬り去ろうとしたのである。[69)]

ジョナサン・エイトキン（Jonathan Aitken）は、サッチャーの政治勘の良さを指摘する。エイトキンによれば、サッチャーは個人的にはキース・ジョゼフを尊敬もし、忠実であったが、政治的には一定の距離を保っていたという。なぜなら、サッチャーはキースにすべての問題のあらゆる側面に良い点を見てしまう性質と傾向があり、これは保守派が必要としている強いリーダーシップをとらせるのに相応しくないと判断していた。そして彼女自身がトップに立ちたいという野望は1974年に出てきたという。1974年の最初の10ヶ月間、サッチャーは表面上は党首テッド・ヒース（Ted Heath）に忠実で、政治的にはキースを支持する姿勢を保ちながらチャンスを狙っていた。彼女は野望を完璧に周囲に隠しおおせた。エイトキンは「鉄の女の前に鉄の候補者がいた」（The Iron Lady was preceded by Iron Candidate）と結論づけている。[70)]

Ⅲ．サッチャリズムが残したもの

1．規制緩和・民営化政策の功罪

①　金融「ビッグバン」のその後

イギリスの証券市場は1986年10月27日のいわゆる「ビッグバン」によって大きく変質したといわれる。それはロンドンの金融界「シティ」に規制の無い、競争的な、さらにグローバルな市場を作り出した。それに誘引されるように、アメリカの3大投資銀行もニューヨーク市場よりも規制のゆるいロンドンに国際金融の活動の中心を移した。ロンドン証券取引所はこれによって活気をとりもどし、再び世界金融の中心になった。[71)]

しかし、伊東光晴は、こうした状況をケインズを引用しながら批判する。伊東は、「ケインズの考えの中には、批判的精神や警戒心のないたんなる経済的効率の追求は、望ましい社会制度を壊すかもしれない。あるいは・・・・経済効率を損なっても望ましい制度を維持した方がよいこともあるという考えがあったにちがいない」という。[72)] ケインズは、主著『雇用、利子および貨幣の一般理論』の第12章「長期期待の状態」の第6節で、「一国の資本の発展が賭博場（カジノ）での賭け事の副産物となってしまったら、なにもかもが始末に負えなくなってしまうだろう」さらに、「賭博場は公共の利益のためには近づきにくく、高価につくのがいい、ロンドン証券取引所がウォール街に比べてまだしも罪が軽いのは、国民性の相違のせいであるよりは、平均的なイ

ギリス人にとって、スロッグモートン街は、平均的アメリカ人のウォール街に比べれば、いっそう近づきにくく、またきわめて高価につくという事情によっている。ロンドン証券取引所での取引にともなう場内仲買人（ジョバー）の「利ざや」、高率の売買手数料、それに大蔵省に納付すべき重い移転税・・・・これらは市場の流動性を十分に低下させるはたらきをし・・・・ウォール街にみられるような取引の大部分を不可能にしている」と述べている。[73] つまり、ケインズは証券取引所の規制を緩めて賭博場にしてしまえば、皆んなが望ましいと考えている社会制度を破壊してしまうのではないかと危惧したのである。サッチャー自身も、父親のアルフレッドが証券取引を「バクチ」と考えていたことを認めている。[74]

サッチャーはこうしたことを認識しながらも、あえて「ビッグバン」を遂行したのである。そこに、信念の政治家であるサッチャーの、国を率いているという強い使命感を感じる。1980 年代のイギリスは、それまでイギリス経済を支えていた石炭を中心とする鉱業や工業が衰退して国力が落ちていた。これを挽回するために不退転の決意で取り組んだのが、元々強かった「シティー」を自由化とグローバル化で再び世界一にすることであったといえる。サッチャーの目論見は一応成功したといえる。

しかし、一方「賭博場」と化した証券市場が垂れ流した害毒もまた大きい。

「ビッグバン」によって外国の銀行や証券会社の「シティー」進出が一気に起きた。彼らは早く態勢を整えるために既存の銀行や証券会社から優秀なトレーダやセールスマンを破格のボーナスを含む高給で引き抜いたことから、業績を上げるためには不正もいとわない「いかさまトレーダー」（rogue trader）を生み出すことになった。この代表例が 1995 年にイギリス最古のマーチャント・バンクであったベアリング・ブラザーズを破滅においやった「ニック・リーソン事件」である。[75]

「ビッグバン」のもう 1 つの効果は、イギリス人に金融リスクをとることへの抵抗感を薄れさせ、借金をすることへの抵抗感も喪失させた。こうした風潮を利用して、返済能力のない人々に信用供与して問題になった事件が起きた。その 1 例がテレホン・インターネットバンキング専門の「エッグ銀行」である。彼らが顧客としたのは、銀行員が「金利尻軽女」（rate tarts）と呼ぶ、低金利を求めてクレジットカード会社を頻繁に変える人々であった。つまり誰彼なしにクレジットカードを売ったのである。この銀行は行き詰まり、2008 年 1 月シティグループに買収されたが、突然、会員 16 万 1000 人のエッグのクレジットカードは無効にされてしまった。[76]

さらに深刻だったのがイギリス第 6 位の住宅金融専門銀行であった「ノーザン・ロック銀行」である。彼らは本来のビジネスである「住宅担保貸付」（いわゆるモーゲージ）のほかに、住宅価格の高騰を担保にした貸付（いわゆるセカンド・モーゲージ）を積極的に展開した。しかも資金を金融市場で調達しながら拡大したため、一旦歯車が狂うと一気に崩壊した。2008 年 1 月 21 日当時のアリスター・ダーリング英財務相は、資金繰りに窮したノーザン・ロック銀行のイングランド銀行からの 240 億ポンドの負債を民間企業に引き受けてもらうことに失敗し、2 月 17 日、同銀行を国有化すると発表した。[77] つまり、国民の税金で救ったということである。

② 電力・水道・鉄道の民営化とその後

電力、水道、鉄道などは、宇沢弘文のいう「社会的共通資本」（Social Common Capital）の一部であって、本来、「原則として私有化を許さず、社会的に共通な間接資本として各市民が自由にそのサーヴィスを享受することができることが、なによりも重要な」ものであるはずである。[78] さらに、野村宗訓も「インフラ供給が市場経済になじまない性格を持つので、その整備主体が基本的に公的機関となるのは当然であろう」という。[79]

それにもかかわらず、サッチャー首相はこれらの事業の民営化を計画し、実行しようとし、彼女を引き継いだメジャー首相が本格的に展開した。その後の労働党政権になっても、ブレア首相は民営化を黙認した。

クリスチャン・ウルマー（Christian Wolmar）によれば、サッチャーが公共事業の民営化をやろうとした動機は、「イデロギーと財政赤字の削減」であった。[80] すなわち、私企業による自由競争は「善」、国有企業などは集産主義（collectivism）だから「悪」という信念から出ており、財政赤字の削減は、「小さな政府」を目指すサッチャーの大きな目標になっていたからである。

まず、電力の民営化についてであるが、シャロン・ビーダー（Sharon Beder）は、「電力民営化は、その規模と重要性という点で、英国における民営化のなかでも最大かつもっとも抜本的な改革」であり、「その目標とされたのは、電力サプライチェーンのさまざまな部分で競争を育成促進することだった」という。[81]

民営化は 1989 年法に基づき 1990 年から開始された。従来発送電部門の独占的事業者であった中央発電庁（CEGB）は、ナショナルパワー社とパワージェン社に分割され、発電事業から切り離された送電事業ではナショナルグリッド社が新設された。一方原子力発電部門の民営化は、きわめて困難で、結局国営のニュークリアエレクトリック社に移管せざるをえなかった。1995 年に政府はふたたび原子力発電部門の売却を企てたが、旧式のマグノックス炉を引き取ってくれる民間企業はなく、結局、国有のマグノックスエレクトリック社に移管された。その他の原子力発電部門は、新設のブリティッシュエナジー社に移管された。同社は廃炉費用を政府が負担するという同意のもと、1996 年に民営化された。配電事業については、1990 年に 12 の地域電力公社が民営化され、その 12 社は「地域配電会社」（REC）と呼ばれ、管轄地域の配電と小売りの責任を負った。また、民営化後、電力取引を競争促進の視点から監視するのが「電気事業規制局」（OFFER）である。S. ビーダーは、「規制局は民営化された独占事業者が消費者を犠牲にして大きな利益を得るのを許したために激しい非難を浴びた。また、規制の代わりに競争を導入するという目標も遠のいた。皮肉なことに、民営化と業界再編は、結局のところ規制削減どころかより多くの規制を必要としたのである」[82] と主張する。

一方、民営化された企業は巨額の利益を得て、高額の株式配当と役員報酬を支払った。電力会社の役員たちは自分で報酬額を大幅に引き上げたほか、数百万ポンド相当の自社株購入権を手に入れた。1990 年度に配電会社の重役の報酬は 6 万ポンドだったが、95 年度には 20 万ポンド超になった。かつての中央発電庁総裁の報酬は 10 万ポンドであったが、分割によって生まれたナショナルパワー社とパワージェン社の最高経営責任者は、1995 年に二人合わせて 85 万ポンド近くを受け取っている。[83]

さらに、別の問題が発生している。それは電力システムの全面的再統合の進捗と、外国資本による買収である。民営化直後は、黄金株（拒否権付き株式）で守られていた企業も、1995 年に黄金株の期限が切れると同時に、買収につぐ買収の嵐にみまわれ、12 社あった地域配電会社のうち 1997 年まで独立を保っていたのは 5 社だけになった。実際のところ、垂直統合の解体や分割はあまり徹底されず、逆に全面統合化が進んでしまった。もう 1 つの目立った動きが、外国資本によるイギリス電力企業の買収である。とくにアメリカ企業は活発で、1998 年には、イギリスの配電・小売供給事業者の 60％はアメリカ資本に握られた。しかし、2001 年のカリフォルニア電力危機を境に、彼らの動きは下火となり、代って今度はヨーロッパ企業の進出が、目立つようになった。たとえば、パワージェン社はドイツのイーオン社に、2002 年にはイノジー社が同じくドイツの RWE 社に買収された。この結果、イングランドとウェールズの小売供給事業者のうち、イギリス資本はブリティッシュエナジー社のみとなってしまった。また、ロンドンエレクトリー社は、サウスウエスタン社、ヨークシャー社、ノーザンエレクトリック社を買収したが、自らも「フランス電力公社」（EDF）に買収されている。[84)]

こうした統合によって、確かに、生き残った企業の企業価値は上ったかも知れないが、その「業績＝利益」は株主や経営幹部の懐に入り、消費者の期待するサービスの向上や電気料金の値下げというところには必ずしも結びついていないとの印象を受ける。また、電力という重要なインフラが外国資本に牛耳られるというのは安全保障上おもしろくない状態であるといわざるをえない。

なお、くだんのブリテッシュエナジーは、その後多額の赤字を計上し、2002 年実質的に破産した。しかし、イギリスの電力の 5 分の 1 を供給し、8 つの原子力発電所をもつ同社の倒産を放置すれば、重大な事態を引き起こすと判断したイギリス政府は、30 億ポンドを超える負債の肩代わりをした。[85)] ここでも莫大な国民の税金が投入されたのである。

次に水道の民営化であるが、サッチャー政権は、当初自然独占性の強い水道事業の民営化には消極的だったといわれているが、1985 年に政府と国有企業との間で料金改訂をめぐるトラブルが発生したことを機に、民営化に傾き、1989 年に「水管理公社」（Water Authorities）の株式売却を実施するための「水法」（Water Act）を成立させた。この結果、10 あった「水管理公社」から規制部門が分離され、民間の水道事業社 10 社が誕生した。ただし、河川の集水・貯水を基礎に区分された地域独占はそのまま維持された。また、民営化後、水道事業の規制について、消費者保護の観点から「水道サービス庁」（OFWAT）が、また水質管理については環境省、全国河川局、および王立公害検査官が中核となり実施されることになった。[86)]

水道事業の民営化発表後、すぐに動いたのがフランス企業である。中でも「サウアー」（SAUR）「ジェネラル」（Cie Générale des Eaux）、「リヨネーズ」（Lyonnaise）の 3 社が積極的であった。しかし、民間企業とくに外国資本のイギリス企業買収の動機は「公共の利益」ではなくて「自己の利益」である。したがって、たとえば、1989 年 12 月の水管理公社の株式売却の直後に進出した「リヨネーズ」によってアングリアン（Anglian）、ウェセックス（Wessex）、セブン・トレント（Seven − Trent）の株式が買い集められ、業界に大きな衝撃を与えた。しかも 1 年後に、「リヨネーズ」は突然ウェセックスとセブン・トレントの株式を手放している。[87)] こんなことでは、

水道にとって一番重要な「安定供給」が脅かされかねない。

さらに、民営化後、メーター制の普及率の低さも原因しているとされるが、水道料金は下がるどころか逆に値上がりしたことが報告されている。[88] これも、民営化はすべて「善」のイデオロギーで突き進んだことの咎であろう。

最後に鉄道の民営化であるが、クリスチャン・ウルマ―は「彼女（サッチャー）の政治的本能は十分に働き、鉄道の民営化を避けさせた」という。[89] その理由は、「鉄道は本来利潤が見込めない事業であり、より小さな、いわゆる利益追求型の会社に分割することは、この根本的な問題をさらに悪化させるだけ」だからである。サッチャーは損失を生む事業を民営化することはできないとの「直観」を持っていたようである。[90]

しかし、サッチャーの後を継いだメジャーは、彼女の懸念をまったく共有せず、民営化がどうすれば可能かを追求した。その結果、1992 年 7 月に民営化の具体的措置を盛り込んだ政府白書が発表された。その具体的な方策とは、列車運行会社とインフラ会社を別会社にする「上下分離」と、列車運行に関する営業免許権を競争入札によって民間企業に与える「フランチャイズ方式」である。[91]

1993 年「鉄道法」が成立し、1994 年 4 月にイギリス国鉄（British Rail）はインフラ部門と列車運行部門の分離に加え、車両部門も独立させる措置がとられたので、「上（中）下分離」と表現することができる。

インフラ部門には、「レールトラック社」（Railtrack）が設立され、1996 年 5 月に株式売却を通して民間企業となった。レールトラック社は、アクセスの配分、時刻表の作成、軌道と信号の管理、インフラ投資を行い、全国のネットワークを効率的に利用しなければならない責務を負わされた。また、エンジニアリング、線路保守等の業務は新設された「インフラストラクチャー・メンテナンス社」と「トラック・リニューアルズ社」に委託された。さらに、レールトラック社と旅客列車運行会社の間に立つ車両リース会社は、「エバーショルト社」、「エンジェル社」、「ポーターブルック社」の 3 社に分割され、それぞれ民間企業になった。なお列車運行については、貨物、小荷物、郵便が旅客と分離された。貨物事業は、石炭・鉄鋼輸送を中心とする「トレインロード・フレイト社」、コンテナ輸送を専門とする「フレイトライナー社」、英仏海峡トンネルを利用する「インターナショナルフレイト社」に 3 分割された。小荷物・郵便事業は、郵便公社との契約に基づき「レッドスター」によって運営されるようになった。旅客部門は以前からのサービス単位である「インターシティ」（都市間輸送）、「ネットワークサウスイースト」（南東部近郊輸送）、「リージョナル・レールウェイズ」（地方鉄道網）に分類され、さらにそれぞれが線路別に細分化され、フランチャイズの入札単位として 25 の組織が作られた。また、規制機関として「鉄道規制庁」（ORR）と「旅客鉄道フランチャイズ庁」（OPRF）が新設された。[92]

2001 年 10 月運輸地方自治体地域省（旧運輸省）のトップであるスティーブン・バイアーズがレールトラック社を政府の管轄下に置くと発表した。これは、民営化されたイギリス鉄道網の中核をなす会社が破産したことを意味する。レールトラック社は、その後実質上特殊法人になり、莫大な額の税金を貪っている。[93]

レールトラック社を破綻に追い込んだのは、2 件の鉄道事故だといわれている。1 件目は、

1999 年 10 月 5 日のラドブルック・グローブの事故である。この事故の遠因は鉄道の分割民営化にあるとされている。この事故で 31 人が死亡し 425 人が負傷するなどイギリス鉄道史上最悪のケースのひとつになった。この事故の直接の原因は、経験の浅い運転士が赤信号を無視して進入禁止線路に入ったことにあるが、実は、前々からその信号機に問題があることが指摘されながら、レールトラック社は適切な対応をとっていなかったことにある。[94)]

2 件目が、2000 年 10 月 17 日に起きたハットフィールドの事故である。この事故で 4 人が死亡したが、その原因は、レールにひび割れが確認されていたにもかかわらず、半年以上修復されないまま放置されたことにある。事故当日、列車が軌道の損傷部分を通過したとき、レールは 300 の破片となって砕け、列車を脱線させたのである。[95)]

クリスチャン・ウルマ―は、これらの重大事故のそもそもの原因は、1996 年～ 97 年の性急な民営化のなか、イギリス国鉄が 100 近い私企業に分割されたことにあると指摘する。分割の結果、鉄道に必須の技術が失われてしまった。たとえば、レールトラック社は、保守整備の統轄をしなければならないのに、関連技術の経験をもたない人たちによって経営されていた。またレールトラック社には、研究部門がなく、研究開発は外部委託された。社内に専門家がいないため、外部のコンサルタントのいいなりになってしまったともいわれている。100 近くの私企業は、業績主義制度のもと、自社の業績を上げることに血眼になるのは当然である。しかも「遅れ」が懲罰の対象になったため、各社はひたすら時間の正確性と運行中止本数に関心を向け、結果的に安全対策がないがしろにされてしまったのである。ウルマーは、重大事故の原因は「杜撰な経営、強欲、そして無能のぞっとする話まるごと全部、鉄道会社の支離滅裂な構造の産物」であると断罪している。後にブレア首相も認めざるをえなかったように、鉄道の民営化は「完全な失敗」であったといえる。[96)]

2. トニー・ブレアの「第 3 の道」

サッチャーの遺産のうちおそらく最重要なのが、トニー・ブレアの「第 3 の道」を生み出したことであろう。岡山勇一と戸澤健次は、「ブレアの率いる労働党はサッチャリズムの洗礼を受けて、いわば二重の意味でその遺産を活用した。一つには、サッチャーが徹底的に労働党を打ちのめした結果、労働党はサッチャリズムに対抗する道を真剣に模索せざるを得ず、その対抗策として左派を抑え、第 3 の道を選択することができた。その意味でニューレーバーは、サッチャリズムが生んだ副産物と見ることも可能であろう。また、第 2 に、ニューレーバーはある分野では文字通りサッチャリズムの残したものを活用した。ストップ・ゴーの悪弊を避け、サッチャー、メイジャーと続いた保守政権下の経済政策を基本的にそのまま継続したのである」と指摘している。[97)]

ブレアがサッチャリズムに対抗するために真っ先に取り組んだのが、重要産業の公有を規定した「党規約第 4 条」の改正である。労働党の改革については、ブレアの前任のキノックやジョン・スミスも実施したが、「党規約第 4 条」だけは、左派の反対、ひいては党内分裂を恐れて手を出せなかった。しかし、ブレアは、この問題に正面から取り組んだのである。ブレアは、1994 年 10 月の労働党年次大会で、党規約改正に簡単に触れたところ、その 2 日後に改正反対派は同じ大会で、改正の可否に関する投票を行い、あっさりとこれを否決してしまった。普通なら、ここ

で時期尚早とあきらめるところであるが、ブレアは負けなかった。大会終了後、すぐに改正案を作成するワーキンググループを結成し、案を練ると同時に、1995年に入ると、第4条改正の必要性を全国の労働党員に直接訴える大キャンペーンを行った。[98)]

ブレアが第4条の改正に自信を持っていたのは、自伝に「第四条は、妥協にはかかわりたくない左派勢力があらゆる場面で繰り返していた空虚な文言であり」、この条項はとくに「生産、分配、変換の手段の公的所有を謳って」いるのが問題で、「1917年、党知識派のフェビアン主義の巨頭シドニー・ウェブがこれを起草したとき」とは異なり、「二十世紀の終わりの世界ではどうしようもなく非現実的どころか、超現実的になって」しまっている。したがって「極端な左派を除けば、第四条を文字通りに信じている者などいなかった」と書いているとおりであろう。[99)]

1995年4月には、反対派による最後の抵抗（全体の11％の集団票を持つ労働組合団体ユニソンが第4条改正に反対する決議を行った）があったが、4月29日の臨時大会で賛成65.23％反対34.77％で改正が決った。[100)]

労働党が「党規約第4条」を改正した意義は大きい。これによって労働党が社会主義政党ではなくなったことがはっきりし、アメリカの共和党と民主党の関係に近いものになったのではなかろうか。これによってイギリス国民は、政権交代によって政策が大きく左右に振れる心配がなくなったといえる。

ブレア政治は、〝サッチャリズム Mark Ⅱ〟、〝レフト・サッチャリズム〟、〝サッチャリズムのブレアヴァージョン〟と呼ばれたりするが、サッチャーとは明らかに異なる政策も実施している。[101)]

まず最初に、大ロンドン市庁（Greater London Authority）の設置が上げられる。サッチャー首相によって1986年に廃止されたGLC（大ロンドン市議会）とLCC（ロンドン区議会）に代わってGLAを設立することを1997年のマニフェストで公約し、翌98年3月には25名定員の市議会と直接選挙で選ばれる市長で構成される大ロンドン市庁の設置に関する国民投票実施法案を可決し、5月7日の国民投票で賛成多数を得た。そして99年11月には大ロンドン市庁法を実施し、ロンドンに86年以降なかった地方政府を取り戻した。[102)]

2番目に、地方分権が上げられる。これは、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの各地方に議会を設置し、権限を委譲して自治の幅を広げようとするものである。地方分権（devolution）は、サッチャーの政権においてまったく顧みられることはなかった。ブレアは政権掌握後の1997年7月に地方議会開設に対する国民投票を実施して可決すると、9月にスコットランドそしてウェールズでも国民投票が実施され、各々賛成多数となった。これを受けて、翌98年7月にウェールズ統治法、11月にはスコットランド法を可決して、議会の開設にこぎつけたのである。[103)]

3番目は、貴族院改革である。従来貴族院には759名の世襲貴族院議員、510名の一代貴族院議員および26名の聖職貴族院議員が在籍していた。しかしながら、1,295名の貴族院議員全員が座るだけの席がなく、一方で、世襲貴族院議員の中には、議会出席率が極端に低い有名無実の議員も多数存在した。こうしたことを背景に改革は実施され、その結果貴族院の構成は、一代貴族567名、世襲貴族92名、聖職貴族26名となった。サッチャーは自らが女男爵（baroness）に叙

され、これを受け入れていることからも、何百年も続く伝統を変革することなど思いもよらなかったと考えられる。

4番目は、北アイルランド問題についてである。サッチャーにとって、IRA（アイルランド共和国軍）はテロ組織であり、交渉の対象ではありえなかった。しかし、ブレアは97年5月の総選挙に勝った後、首相としての最初の公式訪問地として北アイルランドのベルファストを選んだ。ブレアは同年10月、シン・フェイン党のジェリー・アダムズ党首と会談し、北アイルランド問題に正面から取り組むことを行動で示したのである。サッチャーが、IRAの決死のハンガーストライキに対しても表情一つ変えなかったこととの違いである。[104)]

3. 貧富の差の拡大と新たな階級対立

「サッチャリズム」が浸透した結果、貧富の差が拡大したことは、さまざまな方面から指摘されていることである。サッチャー派（Thatcherite）の考えでは、金融業とサービス業が未来の産業であり、製造業は過去のものでしかない。[105)]

サッチャー政権は、「金融ビッグバン」をはじめ数々の規制緩和を行い、イギリス産業の中心を製造業から、金融業、サービス業へシフトさせるよう誘導する一方、労働組合を徹底的に弱体化させることで、衰退産業から大量に解雇者がでることを容認した。2000年代のはじめに、イギリス労組AMICUSのロジャー・ジーリーは「英国の製造業では年間10万人規模で就業者が減っている」と報告している。これには、イギリス労働法も影響しているという。イギリスでは、工場閉鎖は90日前の通告でよく、従業員の退職補償金も少なくてよい。実際「ドイツやフランスの企業は、イギリスは解雇が容易だから進出する」のだと指摘する向きもある。[106)]

オーウェン・ジョーンズは、「サッチャー政権下では富、そして裕福であることは称えられるべきことだった。・・・・人が裕福になるのは勤勉と才能の賜物だという考えを浸透させると同時に、裕福になれないのは何かが欠けているからだという暗黙の了解を広めた」という。こうした風潮が広がる中、富裕層、なかんずくシティで働く人々は、かつてないほど憧れの的になったのである。[107)]

シティで働くトレーダーなどの高額所得層は「ヤッピー」（yuppie）と呼ばれた。イアン・マーチンによれば、yuppie（young urban professional）という言葉を最初に使ったのは、アメリカのジャーナリスト、ダン・ロッテンバーグ（Dan Rottenberg）で、イギリスでは1984年に初めて使用されたという。[108)]

実際のところ、現在のイギリス経済の2割近くは「金融関連」で成り立っており、金融サービス業が納める法人税はイギリスの法人税収全体の約4分の1を占めるといわれている。[109)]

一方で、鉱業や製造業からはき出された労働者は、仕方なく、「ゼロ時間契約」で働いたりしている。こうした労働者は今150万人いるといわれており、彼らはたった1時間前の通告で雇用や解雇されるという苛酷な状態にある。また、2008年の統計によると、サービス業全体の労働者の半分は、年収が2万ポンド（約290万円）に達しない。[110)]

最低賃金も1999年以前は時給1.50ポンド（約220円）であったものが、2010年現在17歳以下3.57ポンド（約520円）、18～21歳4.83ポンド（約700円）、22歳以上5.80ポンド（約840円）

と依然低い水準にある。[111)]

一般に、「貧困」とは住居費を差し引いたあとの収入が、全国中央値の60％に満たないことを指すが、サッチャーが政権に就く直前500万人だった貧困者数が、2010年には1,350万人（総人口の5人に1人）となっている。[112)]

こうした状況下「チャヴ」（chav）という言葉が生まれた。この言葉はロマ族の言葉で子供を指す「チャヴィ」からきているが、チャヴはもっぱら労働者階級を侮辱する言葉として使われている。しかし、もう少し詳しく見れば、「チャヴ」は従来人々が持っていた「労働者階級」ではなく、そこからこぼれ落ちた「下流階級」すなわち「貧困層」を指すことがわかる。とくに最近では「白人の下流階級」をいい表すようになっている。[113)]

右派のジャーナリスト、サイモン・ヘッファーは、「何世紀にもわたって質素な環境で暮らす、尊敬すべき労働者階級の家族はもうどこにもいない。彼らは福祉国家から給付金をもらう下流階級か、その上の中流階級になった」というように、労働者階級に分断が生じたことがわかる。オーウェン・ジョーンズは、サッチャーの「買う権利」で有名な住宅政策も、労働者階級に亀裂を生じさせたという。貧しすぎて「買う権利」を行使出来なかった人々は公営住宅にとどまるしかなく、やがて公営住宅は、ひどく貧しく、荒廃していて、犯罪が多発すると噂される所になっていった。[114)]

大胆な規制緩和とグローバル化によってイギリス経済はたしかに全体としては良くなった。裕福になった人々は、「高い経済成長の恩恵は国民に広く行き渡っている。貧困層も例外ではない」と主張する。しかし、現実には、「トリクル・ダウン」（富は上から下へしたたり落ちる）は起きなかったし、「潮が満ちればあらゆる船が持ち上げられる」と説明していた保守党も、それが誤りであったと認めている。実際に起ったことは、「勝者総取り」であった。[115)]

サッチャー派やニューレーバーがいうような、「貧しい家庭から這い上がって成功する人間」もいるにはいるが、その確率は著しく低い。皆んなが自由に階層を移動できるというのはおとぎ話にすぎなかった。社会移動性は、彼らがいうほど高くはなく、いったん属した階層から脱出するのは難しいのが現実である。[116)] こうしたことから、新たな階級対立が生じつつあるといえる。

おわりに

サッチャーは、従来のコンセンサス政治を打破し、イギリスを変えたことは確かである。サッチャーは、第二次世界大戦後のイギリスに安定をもたらした手厚い福祉政策を集産主義と決めつけ、福祉政策を容認する保守党内の議員たちを「ウェット」（wet）（＝感傷的で弱気な連中）と切り捨て、父親からたたき込まれた、ヴィクトリア朝風の勤勉、倹約、自助、自由と自己責任を旗印に突き進んだ。その破壊力は強烈であった。しかし、その結果さまざまな問題も生れた。

中でも最大の問題は貧富の差の拡大である。「サッチャリズム」が進展するにつれ、鉱業や製造業から金融業やサービス業へ大きな人々の移動があった。問題は、それらの人々が失業したり、職にありつけたとしても極めて低賃金のしかも身分の不安定なものであったことである。この過程で多くのコミュニティが崩壊し、労働組合の支援もなく孤立化した無力感を強く感じる人々が

貧困層に落ちて行ったのはある意味当然である。サッチャーは、これを「自助努力が足りない」といってのけたのである。これでは「社会的ダーウィニズム」とのそしりを免れない。ハーバート・スペンサーは、動物と同じように人間にも「適者生存」は当てはまるとしたが、これは到底受け入れることはできない。[117)]

サッチャーは、下院議員になった後、キース・ジョゼフの影響で「新自由主義」の思想に染まっていったが、その背後にあるのは、ロバート・ノージック（Robert Nozick）を始祖とする「自由至上主義」つまり「リバータリアニズム」（Libertarianism）である。ノージックは、国家について、「暴力･盗み･詐欺からの保護、契約の執行などに限定される最小国家は正当とみなされる。それ以上の拡張国家はすべて、特定のことを行うよう強制されないという人々の権利を侵害し、不当であるとみなされる」と主張する。[118)] サッチャーが影響を受けたフリードリッヒ・ハイエクやミルトン･フリードマンの考え方はノージックと根は同じである。しかし、こうしたいわば「自由放任主義」（laissez − faire）による自己調整的市場が矛盾を露呈するのは、カール・ポランニー（Karl Polanyi）が『大転換』の中で詳しく分析している通りである。ポランニーは、自由放任主義がもたらす社会状況を「悪魔のひき臼」（Satanic Mills）と表現している。[119)]

イギリスは今こそ、伝統に回帰すべきである。イギリスの伝統的な考え方とは、伊東光晴が指摘するように、経済学を道徳哲学（moral philosophy）を基礎とした道徳科学（moral science）ととらえるもので、自然科学のような科学とは考えない。この道徳科学とその一翼を担う経済学の系統は、アダム・スミスからリカードの体系に分配論を加えたJ. S. ミルへ、さらにリカード理論の近代化と国民分配分の研究、そして何より当時の豊かなビクトリア時代のイギリスに、なぜ多くの貧しい人がいるのかに心を砕き、有名な「冷めた頭脳と温かい心」（Cool head but warm heart）の言葉を残した、経済学の始祖、アルフレッド・マーシャル、それからJ.M. ケインズと続いている。[120)]

ケインズは、ハイエクと同じように、多くの人が不完全な知識しかもっていない個人を前提にしているが、同時に将来が不確実で不安定な社会であれば、個人の責任を超える不平等や失業が生れ、それにともなって社会的公正と経済効率が損なわれると考えていた。なぜなら、ケインズにとっては、ハイエクと違って、自由は目的ではなかったから、社会的公正と経済的効率のために、自由を制約してもよい時もあると考えたのである。問題はそれらのもとにある、社会と人間のあるべき姿を求める正しい道徳哲学の有無である。その実現のための政府の政策介入であれば、たとえそれが自由の制約であっても好ましいと考えたのである。[121)]

ケインズ経済学は1970年代のインフレの高進と景気後退という「スタグフレーション」にうまく対応できず、「マネタリスト」および「リバータリアン」に道を譲った格好になったが、「新自由主義」も大きな矛盾をかかえているように見える。ケインズ経済学を乗り越える、しかもイギリス伝統の道徳哲学に基づく新しい経済学の出現を期待したい。

注

1）Jonathan Aitken：Margaret Thatcher ～ Power and Personality. Bloomsbury Publishing Plc, 2013 pp. 9 ～ 10
2）ibid. p. 25
3）田中文憲：イギリスの興隆と衰退に関する一考察（1）．奈良大学紀要第 44 号．2016 年．pp. 16 ～ 18
4）D. キャナダイン：イギリスの階級社会（平田雅博・吉田正広訳）．日本経済評論社．2008 年．p. 200
5）Jonathan Aitkin：op. cit. p. 31
6）ibid. pp. 44 ～ 45
7）ibid. p. 52
8）山内弘：イギリス・メソディズム研究．ヨルダン社．1990 年．p. 65
9）内海健寿：イギリス・メソジズムにおける倫理と経済．キリスト新聞社．2003 年．p. 17
10）マックス・ヴェーバー：プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神（大塚久雄訳）．岩波文庫．1989 年．p. 262
11）同上　p. 263
12）トーニー：宗教と資本主義の興隆～歴史的研究（出口勇蔵・越智武臣訳）（下）p. 94
13）同上　p. 98
14）浜林正夫：イギリス宗教史．大月書店．1987 年．p. 193
浜林によれば、「メソディスト」というのは「大学の学則に定められた学習の方法（メソッド）に厳密にしたがう」人々というような意味であったらしい。（同上．p. 191）
15）同上　pp. 193 ～ 194
16）山中弘：前掲書 p. 46．p. 204
17）Robin Harris：Not for Turning ～ The life of Margaret Thatcher. Transworld Publishers. 2013. p. 22
18）山中弘：前掲書 p. 42
19）浜林正夫：前掲書 pp. 196 ～ 197
20）Jonathan Aitken：op. cit. pp. 10 ～ 16
21）ibid.　pp. 22 ～ 23
22）Robin Harris：op. cit. pp. 20 ～ 21
23）低教会（Low Church）とは、アングリカン・チャーチ内の福音主義に立つグループ。宗教改革の二大原理、聖書のみ、信仰のみの立場に立ち、典礼よりも個人の改心と聖化を強調する。ウェスリーのメソディスト運動からも大きな影響を受けた。（出典：世界大百科辞典第 2 版）
24）マーガレット・サッチャー：私の半生〔上〕（石塚正彦訳）．日本経済新聞社．1995 年．p. 152
25）「すり込み」：生まれたばかりの動物、とくに鳥類で多く見られる一種の学習。目の前の動く物体を親として覚え込み、以後それに追従して、一生愛着を示す現象。動物学者ローレンツが初めて発表した。（参照：デジタル大辞泉）
26）Jonathan Aitken：op. cit. pp. 21 ～ 22
27）マーガレット・サッチャー：前掲書 p. 41
Margaret Thatcher：op. cit. p. 21
28）Jonathan Aitken：op. cit. p. 23
29）マーガレット・サッチャー：前掲書 p. 41
Margaret Thatcher：op. cit. p. 21
30）マーガレット・サッチャー：前掲書 p. 51
Margaret Thatcher：op. cit. p. 28
31）Jonathan Aitken：op. cit. p. 23

32）John Campbell：Margaret Thatcher, volume one：The Grocer's Daughter, Jonathan Cape. 2000. p. 31
33）Jonathan Aitken：op. cit. p. 33
34）マーガレット・サッチャー：前掲書 p. 192
35）John Campbell：op. cit. p. 64
36）Claire Berlinski：〝There Is No Alternative″～ Why Margaret Thatcher matters ～. Basic Books, 2010. pp. 71 ～ 72
37）ibid. p. 52
38）ibid. p. 76
39）ibid. pp. 84 ～ 85
40）ibid. p. 87
41）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）p. 51
42）マーガレット・サッチャー：前掲書（下）p. 139
43）同上 p. 164
44）同上 p. 306
45）Claire Berlinski：op. cit. p . 135
46）ibid. p. 136
47）本稿では、「隷属への道」（西山千明訳）ハイエク全集Ⅰ～別巻、春秋社、2012 年を参照した。
48）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）p. 81
49）John Campbell：op. it. p. 60
50）ibid. p. 60
51）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）p. 91
52）カール・ポパー：歴史主義の貧困（岩坂彰訳）. 日経 BP 社. 2013 年. 献題
53）マーガレット・サッチャー：op. cit. p. 91
54）同上 p. 91
55）カール・ポパー：前掲書 pp. 9 ～ 10
56）Karl Popper： The Open Society and Its Enemies, volume one：The spell of Plato, Routledge Classics, 2003
57）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）pp. 124 ～ 125
Margaret Thatcher：op. cit. pp. 84 ～ 85
58）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）p. 118
59）Jonathan Aitken：op. cit. p. 151
60）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）pp. 332 ～ 333
61）Margaret Thatcher：op. cit. 〝This book is dedicated to the memory of KEITH JOSEPH″
62）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）p. 190
63）Margaret Thatcher：op. cit. pp. 250 ～ 252
Jonathan Aitken：op. cit. p. 152
64）Claire Berlinski：op. cit. pp. 135 ～ 136
65）Jonathan Aitken：op. cit. p. 151
Margaret Thatcher：op. cit. p. 251
66）Jonathan Aitken：op. cit. p. 152
67）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）p. 338
68）マーガレット・サッチャー：前掲書（下）pp. 306 ～ 307
69）マーガレット・サッチャー：前掲書（上）pp. 348 ～ 349
Margaret Thatcher：op. cit. pp. 262 ～ 263
70）Jonathan Aitken：op. cit. p. 155

71）伊藤光晴：現代に生きるケインズ～モラル・サイエンスとしての経済理論．岩波書店．2006 年．p 39
72）同上 p. 38
73）ケインズ：雇用、利子および貨幣の一般理論（上）（間宮陽介訳）岩波文庫．2008 年．pp. 220 ～ 221
John. M. Keynes：The General Theory of Employment, Interest and Money, Wordsworth Editions Ltd. 2017. p. 137
74）John Campbell：op. cit. p. 30
75）ラリー・エリオット＋ダン・アトキンソン：市場原理主義の害毒　イギリスからの眺め（グリーン裕美＋坂本章子訳）．PHP 研究所．2009 年．pp. 176 ～ 177
田中文憲：ベアリングスの崩壊～マーチャント・バンキングの終焉．奈良大学紀要第 36 号．2008 年．pp. 8 ～ 16
76）ラリー・エリオット＋ダン・アトキンソン：前掲書 pp. 42 ～ 44
77）同上 pp. 49 ～ 50
78）宇沢弘文：近代経済学の再検討～批判的展望～．岩波書店．1977 年．p. 169
79）野村宗訓：イギリス公益事業の構造改革～競争移行期のユーティリティーズ・ポリシー～．税務経理協会 2003 年．p. 138
80）クリスチャン・ウルマー：折れたレール～イギリス国鉄民営化の失敗～（坂本憲一訳）．ウェッジ．2002 年．p. 268
81）シャロン・ビーダー：電力自由化という壮大な詐欺（高橋健次訳）．草思社．2006 年．p. 329
82）同上 pp. 334 ～ 335
83）同上 pp. 336. pp. 339 ～ 340
84）同上 pp. 349 ～ 352
85）同上 pp. 354
86）野村宗訓：前掲書 pp. 28 ～ 29. p. 95
87）同上 pp. 90 ～ 93
88）同上 pp. 30 ～ 31
89）クリスチャン・ウルマー：前掲書 p. 86
90）同上 p. 367
91）野村宗訓：前掲書 p. 31
92）同上 pp. 31 ～ 33
93）同上 p. 6. p. 172. 367
94）同上 pp. 202 ～ 208
95）同上 pp. 7 ～ 9
96）同上 pp. 9 ～ 10. p. 24. pp. 155 ～ 156. p. 232
97）岡山勇一・戸澤健次：サッチャーの遺産～ 1990 年代の英国に何が起こっていたのか～．晃洋書房．2001 年．p. 73
98）同上 pp. 36 ～ 38
99）トニー・ブレア：ブレア回顧録（上）（石塚雅彦訳）．日本経済新聞出版社．2011 年．p. 154
Tony Blair：A Journey, Arrow Books. 2010. pp. 75 ～ 76
100）岡山勇一・戸澤健次：前掲書 p. 38
101）小堀眞裕：サッチャリズムとブレア政治．晃洋書房．2005 年．p. 95
102）岡山勇一・戸澤健次：前掲書 pp. 76 ～ 77
103）同上 pp. 78 ～ 79
104）同上 pp. 81 ～ 86
105）オーウェン・ジョーンズ：CHAVS　チャブ～弱者を敵視する社会～（依田卓巳訳）．海と月社．2017 年．p. 71

106）日本経済新聞社（編）：イギリス経済再生の真実．日本経済新聞社．2007 年．pp. 57 ～ 59
107）オーウェン・ジョーンズ：前掲書 p. 81
108）Iain Martin：Crash, Bang, Wallop ～ The Inside Story of London's Big Bang and a Financial Revolution that Changed the World ～ . Sceptre. 2016. p. 120
109）日本経済新聞社：前掲書 pp. 21 ～ 22
110）オーウェン・ジョーンズ：前掲書 p. 191
111）同上 pp. 253 ～ 254
112）同上 p. 252
113）同上 p. 7. pp15 ～ 16
114）同上 p. 14. pp. 80 ～ 81
115）ポリー・トインビー＋ディヴィッド・ウォーカー：中流社会を捨てた国～格差先進国イギリスの教訓～（青島淑子訳）．東洋経済新聞社．2009 年．pp. 40 ～ 41. p. 63
116）同上 p. 19. p. 136. p. 164
117）ハーバート・スペンサー：ハーバート・スペンサー・コレクション（森村進編訳）．ちくま学芸文庫．2017 年．p. 433
118）ロバート・ノージック：アナーキー・国家・ユートピア（嶋津格訳）．木鐸社．2004 年．p. i
119）カール・ポラニー：大転換～市場社会の形成と崩壊～（吉沢英成他訳）．東洋経済新報社．1984 年．p. 98
120）伊藤光晴：前掲書 p. 25. p. 27
121）同上 pp. 36 ～ 37

Summary

This paper is part of a larger study by the author entitled A Study on Thatcherism.

Part I was published in March, 2018. The current paper follows up with Parts Ⅱ and Ⅲ

Through an analysis of Thatcherism, this paper clarifies that Mrs. Thatcher's idiosyncratic character was largely the product of her father's strict education, emphasizing the importance of industry, thrift, and self-help. Moreover, Mrs. Thatcher's motivation to become a politician was inspired by her father's political and social activities during her childhood in Grantham. The analysis also suggests that Thatcher's strong Methodist faith shaped her as a politician with strong convictions. Born into a lower middle class family, Thatcher possessed a deep admiration for those in the upper class and developed an unshakeable ambition to rise to the top herself.

Thatcherism changed Britain significantly but at the same time, left such negative legacies as an ever widening gap between the rich and the poor. It is now essential to find a new economic strategy which, based on the traditional 〝moral philosophy〞, will rectify the problems brought about by Neo-Liberalism.

〔**Keywords**〕 lower-middle class, Methodism, Neo-Liberalism, Chav